

◆政治改革の遅れと新たな変化

中国共産党第一七回全国代表大会（二〇〇七年十月）の閉幕後、新たな人事評定が行われて中共新指導集団が政治の舞台に登場した。

三〇年の改革・開放を経て、中国のGDPは世界四位となり、貿易総額は世界二位、外貨準備高は世界一位となった。これは市場経済の強大な生命力を示すとともに、中国の経済的基礎に質的な変化が発生し、本質的に国家官僚権力資本と自由民間資本が混合した共生構造を形成していることを示している。

これに比べ中国の政治体制改革は経済基礎の変化に伴った変化を見せず、依然として一党専制の独裁体制を保持し、権力の角逐と権力の配分でも依然として強い人治国家の色彩を示している。しかし、権威的な領袖である毛沢東と鄧小平に対する評価の凋落に伴い、中共の一党専制の独裁体制はポスト権威時代に進み、限界はあるものの改革と進化の変化が次の各点に現れている。

〔一〕指導者の終身制が淘汰、排除され、それに代わって年齢制限と任期有限制（二期制）が実施されている。（中央政治局委員・同常務委員、中央書記処書記、中央軍事委員は原則的に六七歳、省・部級幹部は原則的に六二歳を越えず、職務の任期も原則的に三選を認めない。）

(二) 官員の考査、抜擢、選挙は依然としてブラック・ボックスでの操作で行われているが、各級官員の選挙では差額（候補者と当選者の差）の比率が拡大し官員の考査・抜擢の際の意見徴収の範囲も広まっている。

(三) 第三世代の領袖・江沢民と第四世代の領袖・胡錦濤は「後継者」を指定する独裁権を失い、「寡頭協議指定制」(すなわち、江沢民と胡錦濤が主導する協議で決定)に代わった。ポスト権威時代の領袖は依然として人事面での主導権と六七歳で引退の年齢制限を無視する特権を維持し、さらに黒幕として蔭で政治介入する陋習を保持している。

(四) 中共第一世代の領袖・毛沢東と第二世代の領袖・鄧小平は共に革命闘争の中で敵に勝利して権威ある領袖になったため、毛沢東と鄧小平をトップとする指導集団も、強い革命的イデオロギーの烙印を押されていた。中共第三世代と第四世代の指導集団は、メンバーがすべて中共による政治第一の時代に成長したが、独裁政治による抑圧によって理工系以外を専攻した知識人のエリートが基本的に消滅させられ、その結果、江沢民と胡錦濤の二つの世代の指導集団が「エンジニアによる国家統治」の現象を形成することになった。しかし、第五世代の指導集団になると基本的に中共による建国以降の出生で、「文革」前後に大学に入学し、改革・開放の中で頭角を現したものになる。大学における彼らの専攻を見ると、習近平の法学博士、李克強の経済学博士と多元化している。このような知識の多元化傾向は、中共新指導集団の政策形成に多元化的な転換をもたらすだろう。

◆中国新指導集団の群像と派閥

新しい世代の指導者が次々に登場するのに伴い、また経済の基礎が一年、また一年と変化していくのに伴い、中共政治権力の地図も絶えず塗り替えられている。マルクスは「歴史は再演される。しかし、新しい基礎の上で再演される」と述べている。

人治である中国では歴史が変わらず、中共の一党独裁体制も変わらないが、新しい中共政界人事の変化を追跡することで、読者のために中共の新権力構造と相互関係の政治絵図を描き出すことは依然として可能である。本書は第一部で読者諸氏に政治絵図を全体的に観察するための視角を提供するため、中央から地方に至る各層の中共新指導集団の群像と彼らの間の複雑に錯綜した権力関係、彼らの政策理念、政治功績、性格と特徴などの輪郭を紹介しようと試みた。

人治の中国では権力構成、権力闘争、権力配分などが往々にして派閥勢力と相互に連動している。中国開国の指導者・毛沢東は「党外無党、帝王思想、党内無派、千奇百怪」〔党の外に党を置かないのは帝王思想であり、党内に派閥がないのは奇妙なことである〕と述べているが、現在の中共権力闘争の舞台においても派閥勢力は依然として政治ドラマにおける主役になっている。

◆謝辞

中共の組織構造と中共派閥の歴史的源泉とその変化について高橋博氏が執筆した第二部「中国共産党の組織構造と派閥」の各章・節は、厳密な論証を交えわかりやすく紹介している。これは読者諸氏が当面の中国の政局と権力構造の変化を理解するうえで助けになるだろう。

筆者は中村公省・蒼蒼社社長の励ましと入念な編集、高橋氏の翻訳によって拙文が発行の運びになったことに感謝を表明したい。

楊 中美

二〇〇八年十月十六日